宮城県亘理郡山元町
合戦原古墳群第 2、3 次発掘調査報告

辻　　秀人・加藤　雄大・賀屋　由布・髙橋　伶奈・雫石　千尋
佐藤里佳子・千葉ほのか

調　査　体　制

第 2 次調査

調 査 期 間	2018 年 7 月 30 日～9 月 2 日
調 査 主 体	東北学院大学文学部歴史学科考古学専攻辻ゼミナール
調査担当者	辻　秀人（東北学院大学文学部教授）
調　査　員	横山舞・植松暁彦（大学院博士課程前期 1 年） 安部喜俊・大渡魁人・加藤雄大・賀屋由布・髙橋伶奈（4 年） 佐藤里佳子・雫石千尋（3 年） 板垣渓太・上野加織・大友健太郎・金澤日本・今野莉帆・佐藤志帆 佐藤緋菜・佐藤有莉佳・奈良朋宏・福澤淳之介・横山志穂・吉村菜々子 米澤侑夏（2 年）松橋七海（1 年）
調 査 協 力	山元町教育委員会 山田隆博・佐伯奈弓（山元町教育委員会）
土地所有者	山元町

第 3 次調査

調 査 期 間	2019 年 2 月 28 日～3 月 22 日
調 査 主 体	東北学院大学文学部歴史学科考古学専攻辻ゼミナール
調査担当者	辻　秀人（東北学院大学文学部教授）
調　査　員	横山舞・植松暁彦（大学院博士課程前期 1 年） 安部喜俊・大渡魁人・加藤雄大・賀屋由布・髙橋伶奈（4 年） 佐藤里佳子・雫石千尋（3 年） 板垣渓太・上野加織・大友健太郎・金澤日本・今野莉帆・佐藤志帆 佐藤緋菜・佐藤有莉佳・奈良朋宏・福澤淳之介・横山志穂・吉村菜々子 米澤侑夏（2 年）松橋七海（1 年）
調 査 協 力	山元町教育委員会 山田隆博・佐伯奈弓　（山元町教育委員会）
土地所有者	山元町

例　　言

1. 東北学院大学考古学辻ゼミナールでは 2018 年度に宮城県亘理郡山元町合戦原古墳群の調査を夏、春の 2 回実施した。合戦原古墳群はこれまでに緊急調査、測量調査が実施された。これに加えて 2017 年に山元町教育委員会が性格解明のための調査を実施している。この調査を合戦原古墳群第 1 次調査と理解し、2018 年夏の調査を第 2 次調査､2019 年春の調査を第 3 次調査とした。本書は合戦原古墳群第 2 次調査、第 3 次調査の報告書である。
2. 調査は東北学院大学文学部歴史学科考古学専攻辻ゼミナールのゼミ活動の一環として実施したものである。
3. 調査は東北学院大学文学部教授辻秀人が担当した。調査の主な参加者は東北学院大学大学院文学研究科アジア文化史専攻学生、考古学ゼミナール所属学生を中心とする東北学院大学文学部歴史学科の学生、参加を希望した歴史学科 1 年生である。
4. 作成図面などの整理作業は東北学院大学文学部歴史学科考古学ゼミナール所属の 3 年生が中心となって行った。
5. 本書の編集は辻秀人が担当し、執筆は参加者が分担した。報告の記載は各執筆の原稿に辻が加筆訂正を行ったものであり、最終的な文責は辻にある。
6. 本書に掲載した図面の高さ表示はすべて海抜高、北はすべて真北を示す。

これまでの調査概要

合戦原古墳群は昭和 38 年に国道 6 号線改修工事で一部壊されることになり、事前に調査されたことがある。3 基の古墳が調査されたが、埋葬施設は発見されず、若干のガラス小玉が出土した。(志間　1965)。また、1996、1997 年には考古学研究者有志による測量調査が実施され古墳群全体の姿が明らかにされた（青山、岩見、鈴木、田原、藤沢　2000)。2017 年には山元町教育委員会により発掘調査が実施された。これまでの調査では埋葬施設が発見されず、築造年代も不明で、古墳群の性格を考える上で大きな課題が残されていた。

引用文献

志間泰治　1965 年「合戦原古墳群調査概報」『埋蔵文化財緊急発掘調査概報』

青山、岩見、鈴木、田原、藤沢　2000 年 「宮城県山元町合戦原古墳群測量調査」『宮城考古学』第 2 号

第 1 章　古墳群の概要

1　古墳群の立地

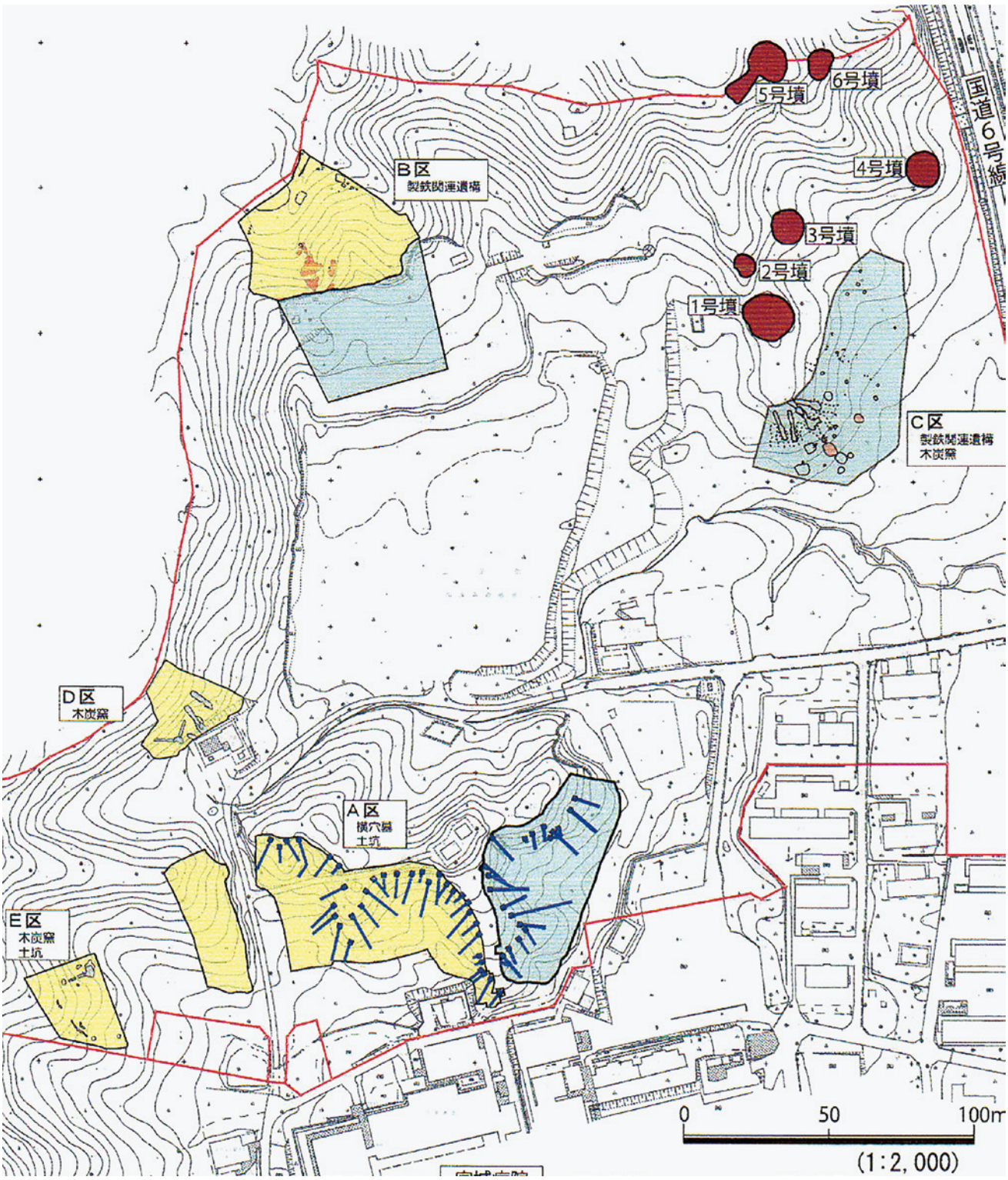
合戦原古墳群は、宮城県亘理郡山元町高瀬字合戦原に所在する。阿武隈高地から樹枝状に東へ伸びる丘陵末端部に立地する。現状では国道 6 号線に接する位置にあたる。古墳群東側台地上に平坦面があるが、その先は海岸平野で、太平洋を望むことができる。

古墳群の周囲には多くの製鉄遺跡群が分布しており、この地域が福島県浜通り地方に展開する製鉄遺跡群の北端であることが判明している。また、南東約 4 km には木簡が出土し、古代官衙と目される熊の作遺跡があり、古墳群の南西に接して 54 基を数える大規模な横穴墓群で、豊富な遺物を持ち、線刻画が発見されたことで知られる合戦原横穴墓群がある。

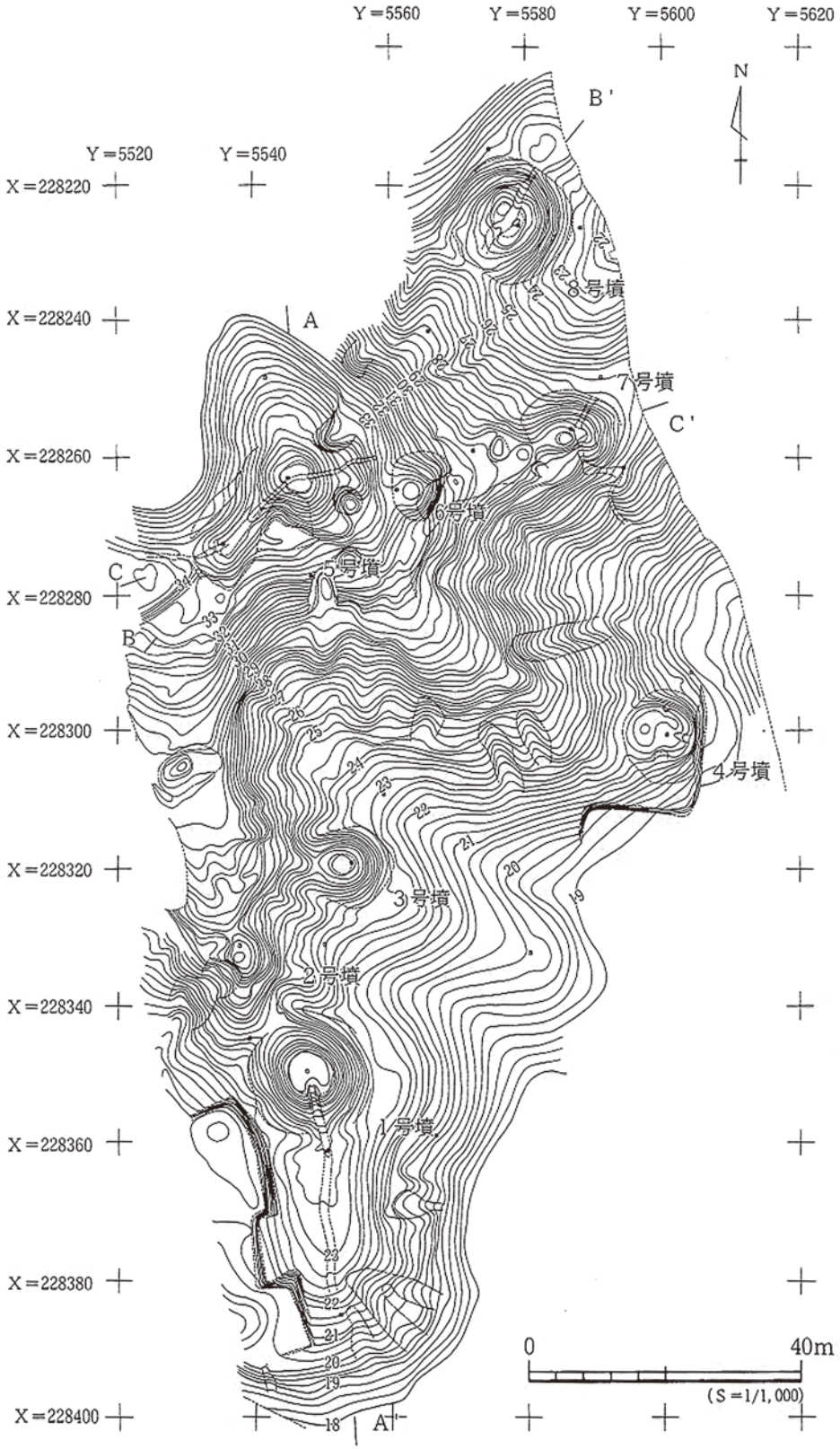
2　古墳群の概要

合戦原古墳群は、測量調査の結果前方後円墳と円墳で構成されることが判明している（第 3 図）。前方後円墳は最高所に位置し、全長約 28 m と見られる。円墳は測量段階では 7 基が確認されている。緊急調査では 3 基が対象とされているが、すでに失われている可能性が高い。本来は前方後円墳 1 基と円墳 10 基程度で構成される古墳群であったと思われる。

第 1 図　合戦原古墳群の位置



第 2 図　合戦原古墳群と横穴墓群位置関係
（宮城県山元町合戦原遺跡説明会資料より転載）



第 3 図　合戦原古墳群測量図（青山、岩見、鈴木、田原、藤沢 「宮城県山元町合戦原古墳群測量調査」宮城考古学第 2 号　2000 年より転載）

第 2 章　発掘調査

1.　調査の目的

東北学院大学辻ゼミナールは、東北地方古墳時代の様相を解明するために活動しており、2018 年夏から山元町合戦原古墳群の発掘調査を開始した。山元町では、3.11 の大災害の復興に伴う大規模な調査が行われている。これまでに合戦原横穴墓群で線刻絵画が発見されるなど大変大きな発見があり、古代役所跡とみられる遺跡や古代製鉄が行われた遺跡も確認されている。この地域は古代の中心地の一つであったと見られる。しかし、合戦原横穴群以前、古墳時代の姿には不明な点が多い。

今回の発掘調査では、合戦原横穴墓群の東側に隣接する合戦原古墳群がどのような古墳群で、時代はいつかなどを明らかにすることを目指し、1 号墳の埋葬施設の調査と 5 号墳の形、規模の確認調査を実施した。また、各古墳は尾根筋末端に築かれているが、尾根の形状からみて古墳が築かれていた可能性の高いと考えられた尾根上の平坦面の様相を知るため、トレンチを設定した。

2.　発掘調査成果

（1）　1 号墳

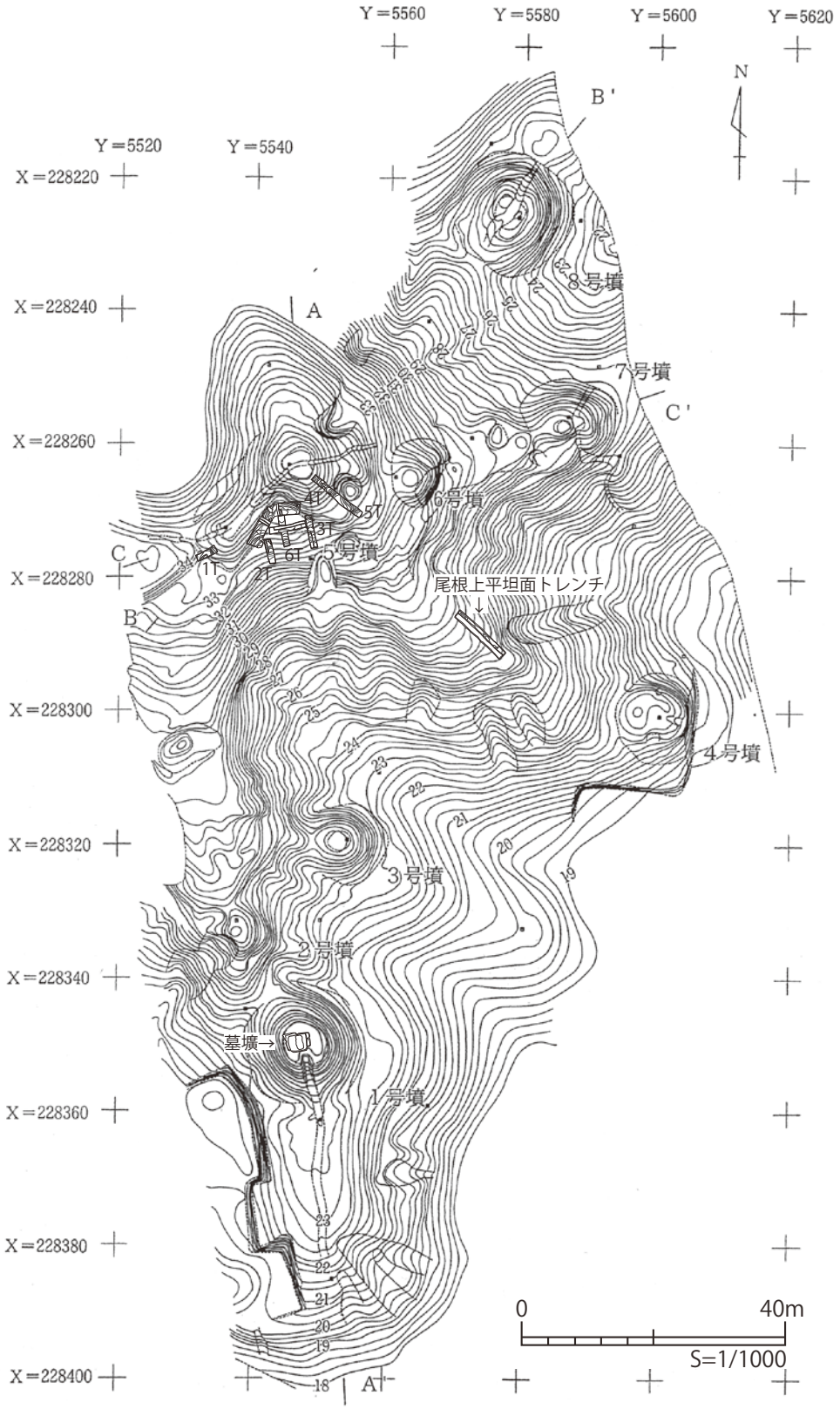
1 号墳は円墳である。直径 13.4 m、高さ約 3 m を測る。合戦原古墳群中最大の円墳である。墳丘は西北から東南方向に伸びる丘陵末端を利用して築かれている。

山元町教育委員会による 2017 年の調査では十字形のトレンチを設定し、墳丘調査を実施している。今回の調査では墳頂平坦面を精査することにより、埋葬施設の検出を目指した。

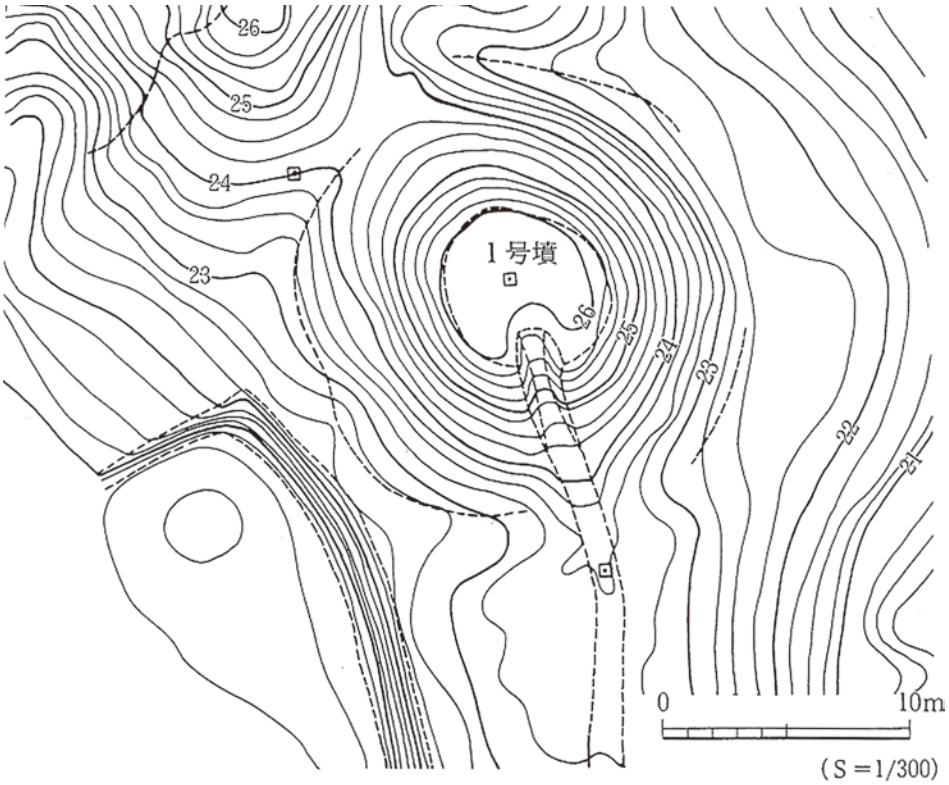
墳頂平坦面は墳丘積み土で構成され、比較的均質なシルト層で、埋葬施設の検出は難航したが、わずかな土質の違いにより墓壙を検出した。墓壙は南北約 3 m、東西約 2.66 m をはかり、正方形に近い形状を呈していた。墓壙上面中央で長楕円形状の落ち込みを発見し、木棺の陥没坑と判断した（写真 1）。

陥没坑内を先行して掘り下げ、追いかけて墓壙埋土を掘り下げる形で作業を進めた。墳長から約 50 cm 掘り下げたところで陥没坑内に白色粘土が崩れた状態で確認されたので、木棺痕跡の上面に達したと判断し、墓壙内も高さを合わせて掘り下げをやめ、面を揃えて精査した。調査段階では認識できなかったが、整理時に写真で陥没坑周囲に薄い粘土層が広がることが判明し（写真 2）、この面で埋葬が行われたことが確認できた。

陥没坑内の白色粘土を掘り上げたところで、木棺痕跡の底面に達した。木棺は、痕跡から長さ約 2.25 m、幅 0.65～0.56 m 程度の大きさと考えられた。埋葬が終了した段階で木棺上および、木棺よりもやや広い範囲に白色粘土が敷かれおり、粘土槨の簡略形を想起させた。木棺痕跡内からは副葬品は出土しなかった。ただ、陥没坑内からは土師器破片が 1



第 4 図　トレンチ配置図（青山、岩見、鈴木、田原、藤沢　2000 からトレンチ位置を加筆して転載）



第 5 図　1 号墳測量図（青山、岩見、鈴木、田原、藤沢　2000 年より転載、一部改変）

写真 1　陥没坑検出

写真 2　1 号墳木棺痕跡全体

写真 3　1 号墳埋葬部　調査風景

点出土している。内面黒色の杯であるが、古墳築造時期を示す十分な資料とは判断しなかった。

（2）　5 号墳（前方後円墳）

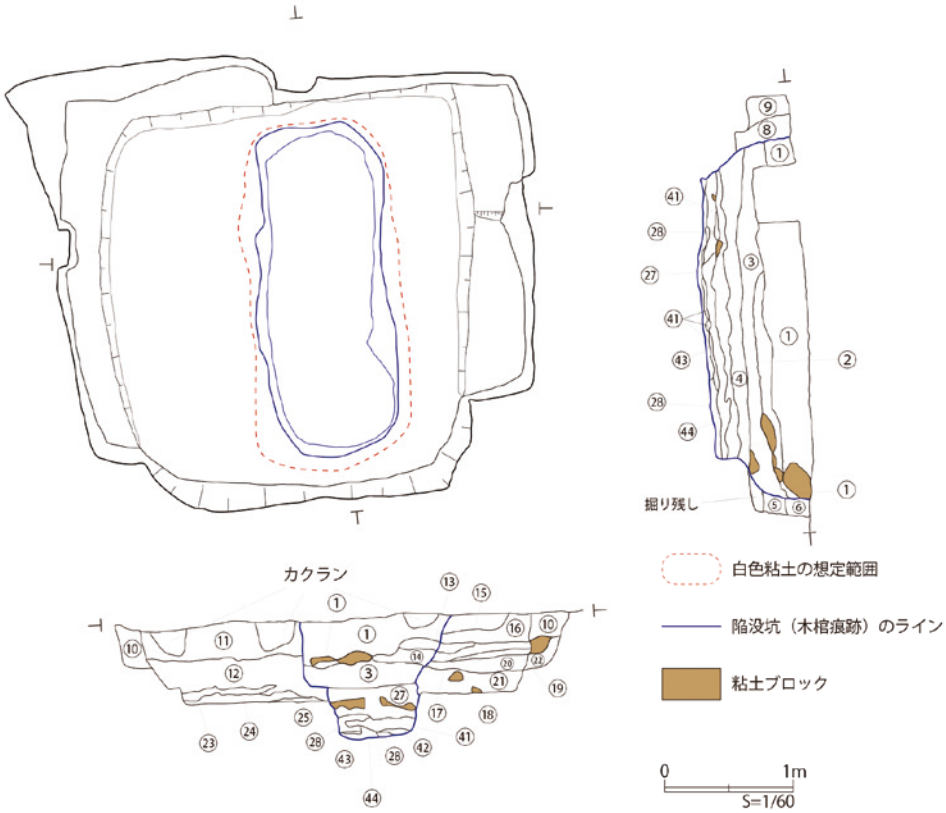
5 号墳は古墳群の中で最も高い位置に築かれた前方後円墳である。今回の調査では山元町が土地を所有する古墳南半部を対象として実施した。調査は前方部、後円部、墳丘南側くびれ部を対象とした。

①前方部先端の調査

前方部先端に第 1 トレンチを設定した。第 1 トレンチは前方部先端から西側に隣接する丘陵の高まりにかけての位置に当たる（第 9 図）。表土を除去すると最も低い部分に若干の堆積土があったが、他は表土直下に地山が確認された。墳丘部分では、地山を整形して斜面が形成されており、その下端に傾斜変換線が観察されたため、前方部墳端と判断した。西側の自然地形との間が浅い溝状になっており、自然地形を削り墳丘との境を意識的に作り出した部分と考えられた。

②後円部南東側墳丘の調査

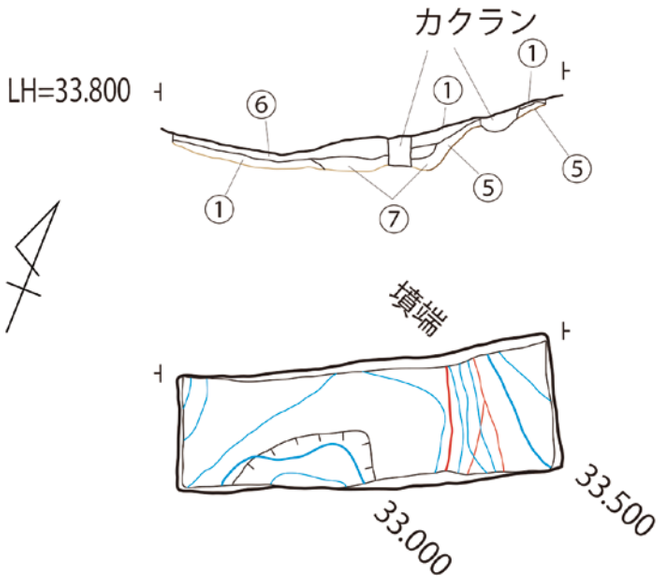
後円部墳丘の構造と墳端を把握するため第 5 トレンチを設定した。表土を除去するとすぐに黄褐色の墳丘面と地山面が現れた。全体では 3 カ所の傾斜変換部分が観察されたが最

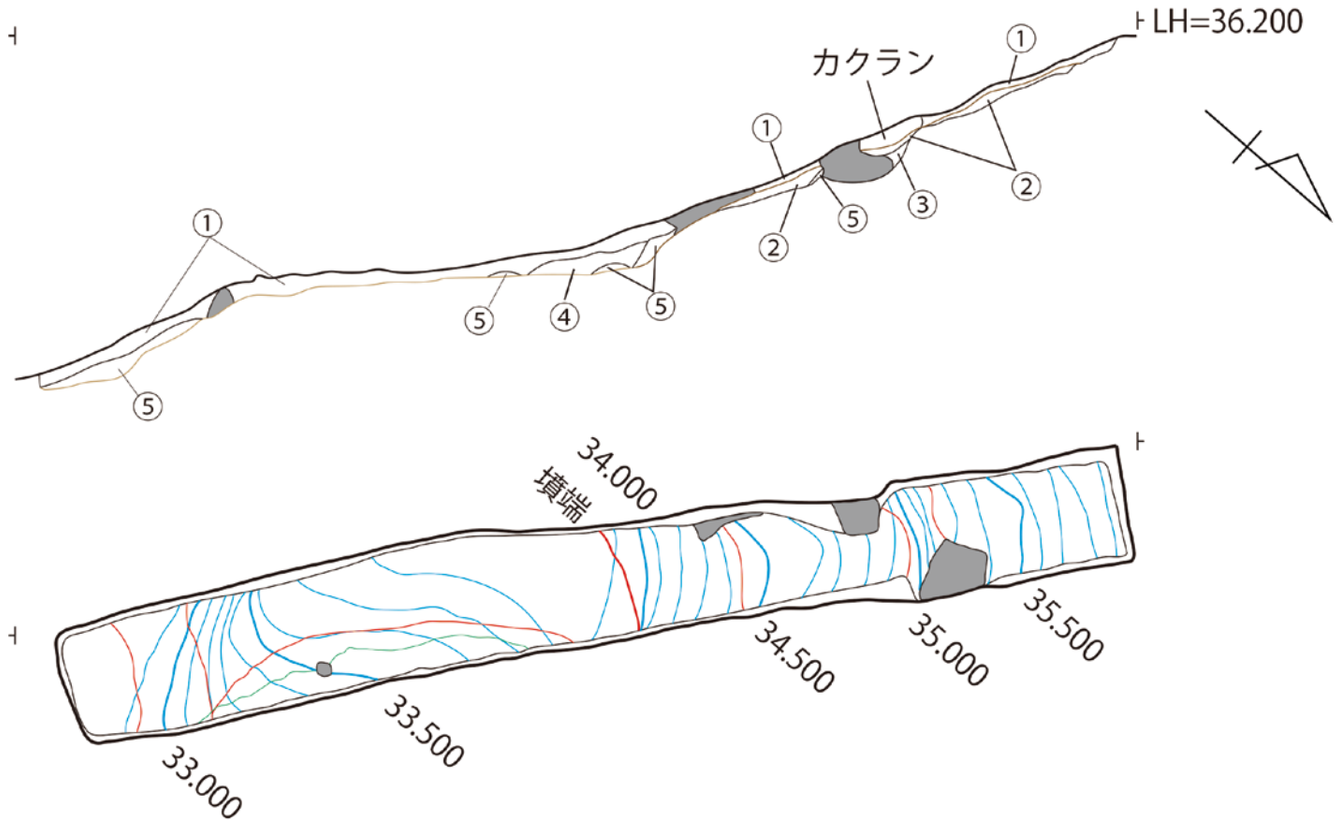


1号墳　土色註記

No.	土色	しまり	粒度	粘度	備考
①	10YR 6/8 明黄褐	中	シルト	弱	
②	25Y 5/4 黄褐	強	シルト	弱	
③	10YR 5/8 黄褐	強	シルト	弱	
④	10YR 6/4 にぶい黄橙	弱	シルト	中	
⑤	10YR 6/8 明黄褐	中	シルト	弱	
⑥	2.5Y 5/6 黄褐	中	シルト	弱	
⑦	2.5Y 4/6 オリーブ褐	弱	シルト	中	
⑧	10YR 5/8 黄褐	中	シルト	弱	
⑨	2.5Y 6/8 明黄褐	弱	シルト	弱	
⑩	10YR 6/6 明黄褐	強	シルト	弱	墓壙外　墳丘積土
⑪	2.5Y 5/6 黄褐	中	シルト	弱	墓壙埋め土
⑫	10YR 6/8 明黄褐	中	シルト	中	墓壙埋め土
⑬	2.5Y 6/8 明黄褐	弱	シルト	弱	陥没坑内土
⑭	10YR 7/4 にぶい黄褐	中	シルト	弱	陥没坑内土
⑮	10YR 6/6 明黄褐	中	シルト	弱	墓壙埋め土
⑯	10YR 5/8 黄褐	弱	シルト	弱	墓壙埋め土
⑰	10YR 7/4 にぶい黄橙	中	シルト	弱	墓壙埋め土
⑱	10YR 6/4 にぶい黄橙	中	シルト	中	墓壙埋め土
⑲	2.5Y 6/3 にぶい黄	弱	シルト	弱	墓壙埋め土
⑳	7.5YR 5/8 明褐	弱	シルト	弱	墓壙埋め土
㉑	10YR 5/6 黄褐	中	シルト	中	墓壙埋め土
㉒	10YR 5/8 黄褐	中	シルト	弱	墓壙外　墳丘積土
㉓	10YR 4/6 褐	中	シルト	中	墓壙埋め土
㉔	10YR 6/8 明黄褐	中	シルト	中	墓壙埋め土
㉕	10YR 6/6 明黄褐	中	シルト	中	墓壙埋め土
㉖	10YR 5/6 黄褐	弱	シルト	強	陥没坑内土
㉗	10YR 5/6 黄褐	中	シルト	中	陥没坑内土
㉘	10YR 5/8 黄褐	弱	シルト	弱	陥没坑内土
㊶	10YR 5/8 黄褐	中	シルト	中	陥没坑内土
㊷	2.5Y 5/3 黄褐	中	シルト	中	陥没坑内土
㊸	2.5Y 4/2 暗灰黄	弱	シルト	弱	陥没坑内土
㊹	10YR 6/8 明黄褐	弱	シルト	弱	地山

第 6 図　第 1 号墳　埋葬施設平面、断面図





No.	土色	粘性	しまり	粒度	備考
①	7.5YR3/2黒褐	中	中	シルト	表土
②	10YR4/6褐	中	中	シルト	積土
④	10YR6/8明黄褐	強	強	粘土	地山
⑤	10YR6/6明黄褐	中	弱	シルト	流出土
⑥	10YR4/6褐	中	弱	シルト	西側からの流出土
⑦	10YR3/4暗褐	中	弱	シルト	くぼみのたまり土
⑯	10YR2/1黒	弱	中	シルト	旧表土
⑰	10YR3/3暗褐	弱	中	シルト	墳端谷折れ層に堆積した土

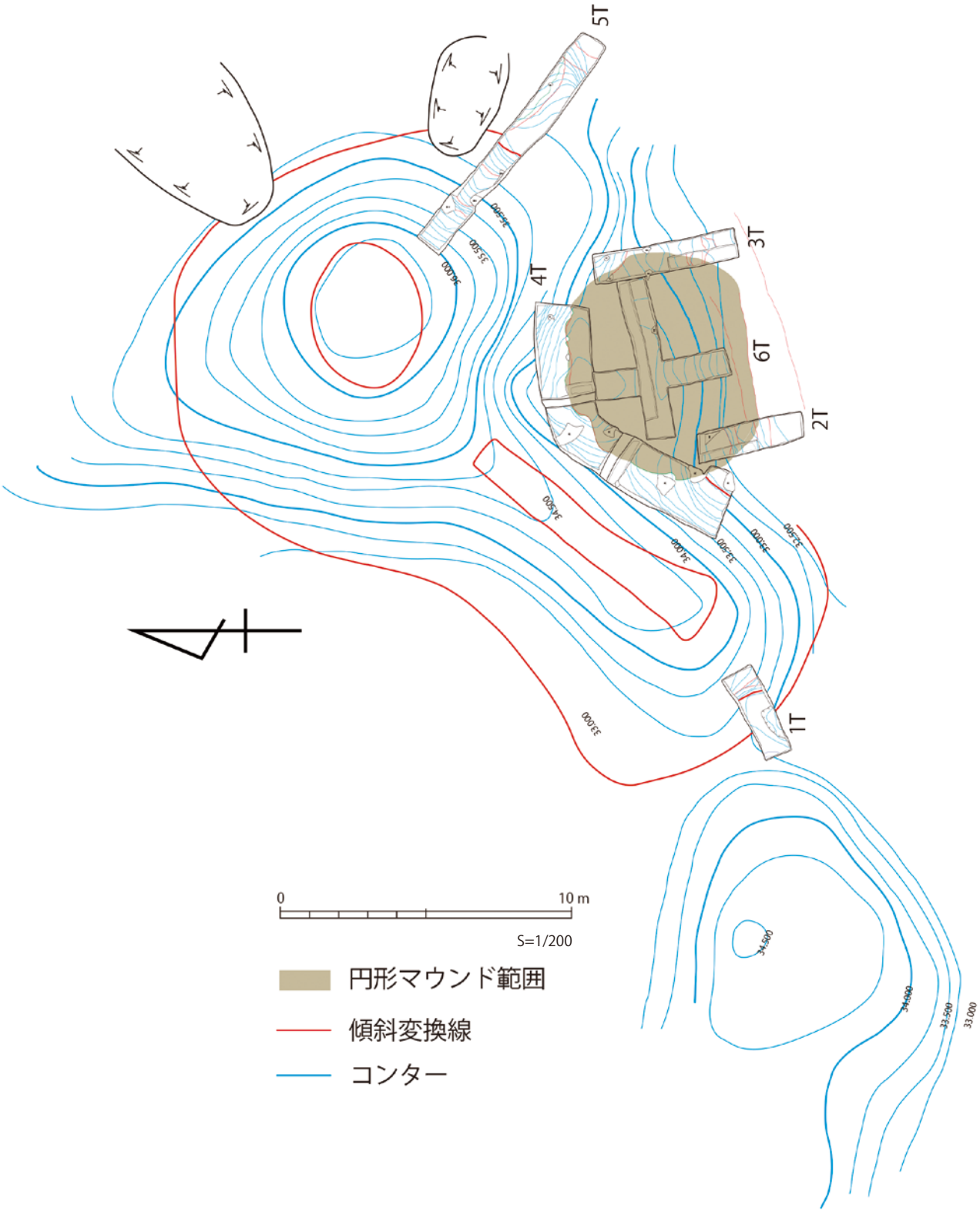
凡例

- 傾斜変換線
- コンター
- 撹乱の範囲
- 地山
- 墳丘面
- 木の根

0 5m

S=1/60

第 9 図　第 1、第 5 トレンチ平面、断面図



第 8 図　5 号墳トレンチ配置図

写真 5　第 1 トレンチ全景

写真 6　5 号墳前方部墳端斜めから

下段の傾斜変換線は自然地形と判断された。最上部の傾斜変換は比較的緩やかで、最上部の最も傾斜が大きい斜面と中間の比較的傾斜が緩やかな部分との間に認められた。調査範囲が狭く、今後の検討が必要であるが、この部分がテラスとなる可能性があると考えた。また、中間部分の傾斜変換線は比較的明瞭で、墳端部であると判断された（第 9 図）。

墳丘テラス部分付近で土質の違いが認められた。上半部は比較的粘質が強く、墳丘積み土と判断された。それ以下は地山である。墳丘は下部の地山を削り、その土を積み上げる形でつくりだされたと考えられた。

③墳丘南側の調査

墳丘南側の墳端線を確認するために第 4 トレンチを設定した。第 4 トレンチは墳端が想定される墳丘に沿った位置に設定した（第 10 図）。第 4 トレンチの西端ではごくわずかな範囲で墳端を確認した。しかし、西端を除く位置では墳丘の傾斜面に乗る形で黄褐色の土層が広がった。この土層の分布範囲と形状を確認するために第 2、第 3、第 6 トレンチを設定した。

その結果この土層は墳丘南側に約 5 m にわたって平坦面を形成していることが判明した。この土層の下層からは平安期の土壙が検出されており、平安期以降に人為的に積まれた上層と考えられた（写真 8）。積み土上面から鉄滓が数点出土している。

調査の結果墳丘南側の墳端の多くは平安期以降の積み土に覆われており確認できなかった。積み土は鉄滓の出土からこの地域で盛んな製鉄に関係する遺構である可能性が高い。

ま　と　め

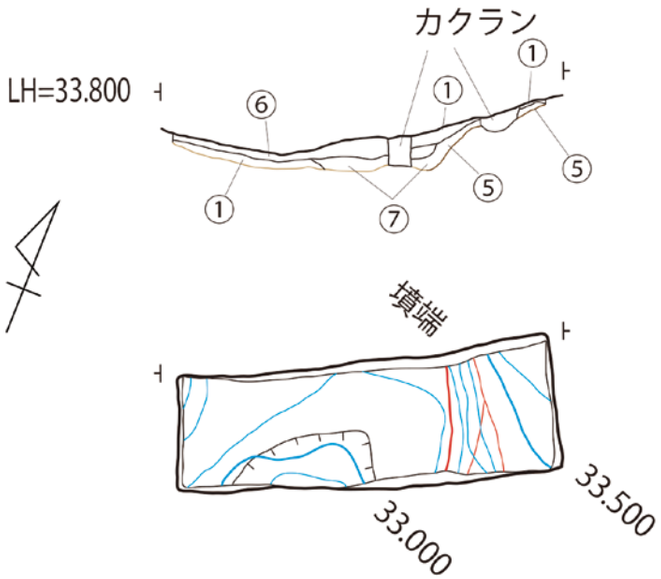
合戦原古墳群第 2、3 次調査は古墳群の様相を把握することを目的に実施した。1 号墳の調査の結果、埋葬施設は木棺直葬であることが判明した。木棺を埋納した後に、木棺よりもやや広い範囲に粘土を敷く、粘土槨の伝統を思わせるようなことをしている点に特徴がある。このような埋葬方法は地域的な違いはあるかもしれないが、古墳時代前期から中期にかけての古墳に見られる場合が多い。

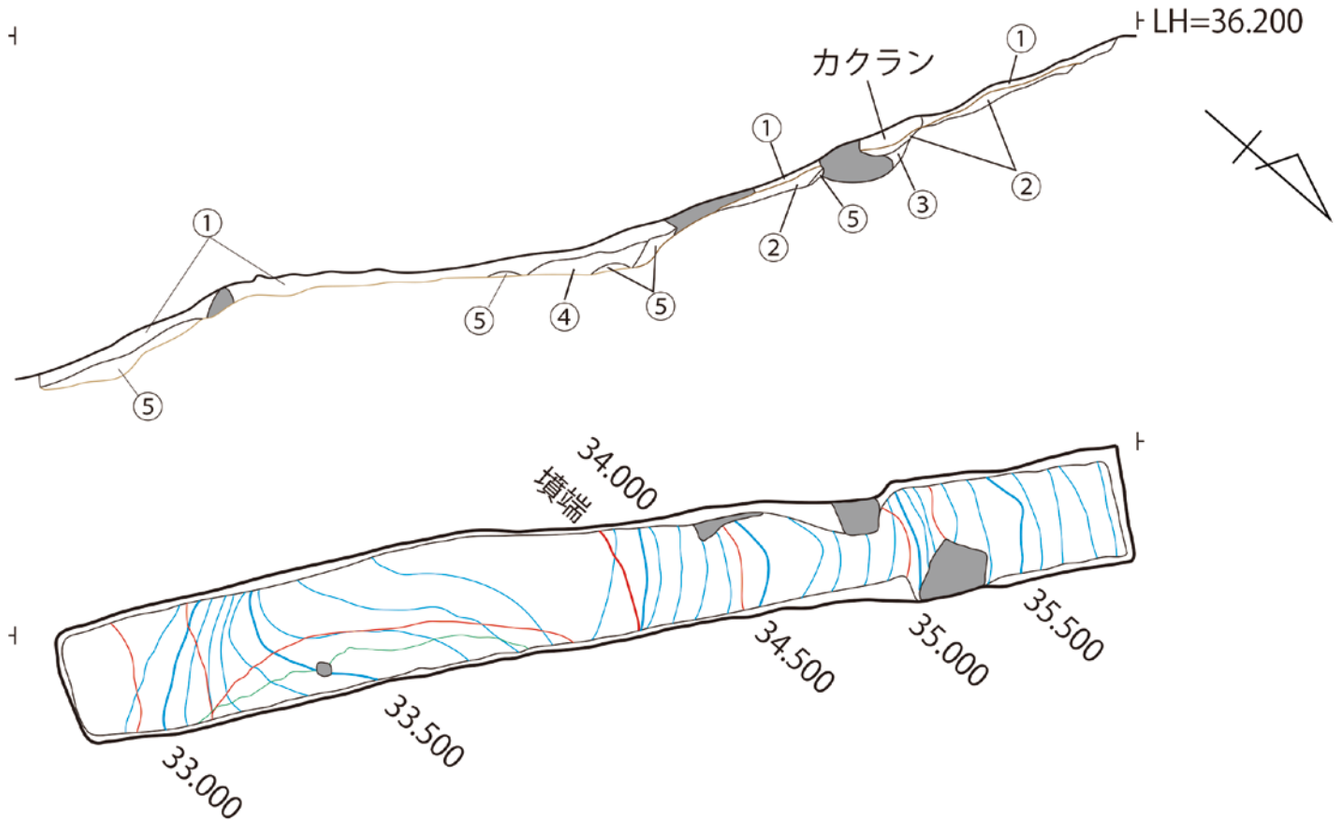
5 号墳は小型の前方後円墳で、全長 25.4 m、後円部直径 15.7 m、前方部前端幅 10.0 m の規模であることが判明した。墳丘南側は平安期以降の積み土で平場が形成されており、正確な墳形はわからないが前方部が細長く、地形を利用して築かれていることから、古墳時代前期から中期にかけての特徴を備えているといえよう。

未だ不明な点は多いが、現状では合戦原古墳群は小型前方後円墳を主墳とする古墳群で、築造時期は古墳時代前期から中期にかけてを想定しておきたい。古墳群中に横穴式石室の存在を示唆する石材が認められないこともこのような想定を支持するのだろう。

ただ、今回の調査と過去の調査を通して古墳群の築造時期を示す遺物が一切出土していない。また、埋葬施設が 1 号墳と同様であるのか否かも検討が必要である。今後も調査を継続していきたいと考えている。

写真 7　第 5 トレンチ後円部墳丘調査区全景





No.	土色	粘性	しまり	粒度	備考
①	7.5YR3/2黒褐	中	中	シルト	表土
②	10YR4/6褐	中	中	シルト	積土
④	10YR6/8明黄褐	強	強	粘土	地山
⑤	10YR6/6明黄褐	中	弱	シルト	流出土
⑥	10YR4/6褐	中	弱	シルト	西側からの流出土
⑦	10YR3/4暗褐	中	弱	シルト	くぼみのたまり土
⑯	10YR2/1黒	弱	中	シルト	旧表土
⑰	10YR3/3暗褐	弱	中	シルト	墳端谷折れ層に堆積した土

凡例

- 傾斜変換線
- コンター
- 撹乱の範囲
- 地山
- 墳丘面
- 木の根

0 5m

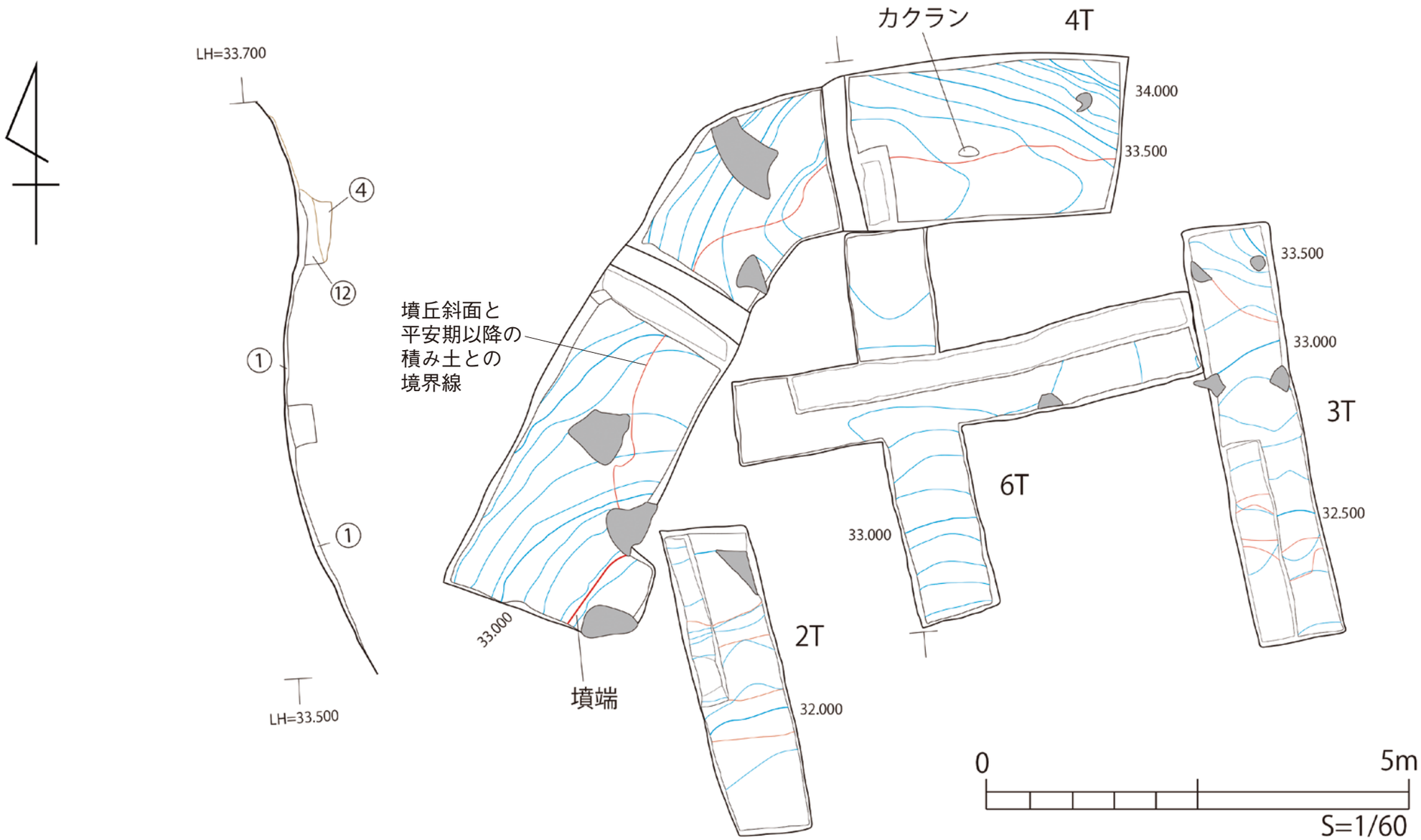
S=1/60

第 9 図　第 1、第 5 トレンチ平面、断面図

写真 8　墳丘南側斜面と平安期以降の積み土

写真 9　墳丘南側調査区全景

写真 10　5 号墳くびれ部調査風景



4・6トレンチ南北セクション西壁

No.	土色	粘性	しまり	粒度	備考
①	7.5YR3/2黒褐	中	中	シルト	表土
⑫	10YR6/6明黄褐	中	中	シルト	円形マウンド構成土
④	10YR6/8明黄褐	強	強	粘土	地山

傾斜変換線
コンター
墳丘面
地山
木

第 10 図　5 号墳第 2、3、4、6 トレンチ平面断面図

謝辞

調査に実施に当たっては、山元町教育委員会をはじめ関係機関の皆様、調査を暖かく見守ってくださいました山元町の皆様、調査地に隣接する復興住宅にお住まいの皆様にご協力を感謝申し上げます。

写真 11　現地説明会